

台湾高雄日本人学校における日本語能力向上を目指した授業実践

前高雄日本人学校 教諭

北海道河東郡鹿追町立鹿追中学校 教諭 佐藤 淳一

キーワード：連続型・非連続型読解力、多面的思考、学び合い、実社会に生きてはたらく言語活動

1. はじめに

在外教育施設に通う児童生徒は国内で生活するよりも母国語に触れて生活する機会が限られている。インターネットが普及した昨今、多くの児童生徒が日本国内の情報を身近に感じてはいるものの、本校の実態としては国内の小中学校に通う児童生徒と比べ、状況に応じて適切に日本語を理解したり使ったりすることが苦手であると感じられる。また、本校では、両親のどちらかが台湾国籍（或いは第3国）に国籍を有する児童生徒の割合が4割以上を占め、北京語や台湾語を主言語としている家庭も数多くみられる。さらに、保護者が日本国籍を有する者であっても幼少期より長期にわたって台湾で生活し、日本の学校に通った経験がないことも多い。特に低学年児童においては日本語の発音や助詞の使い方、一般的な語彙力等に不安がみられる傾向にある。

このような実態を踏まえ平成25年度より児童生徒の日本語力向上を校内研修のテーマに位置付け、発達段階に応じた手立てを小中各学部内で考慮し、小学部では語彙力を増やしたり文節のつながりを意識したりする基礎・基本の定着を、中学部においては発展として「日常の生活に生きてはたらく言語感覚を磨く」ことを目標に実践を行ってきた。以下に実践にあたった平成25年度～27年度の中学部読解力研修の体制づくりと成果を中心に概略を紹介する。

2. 平成25年度の実践と考察

(1) 「読解力」の定義

25年度の中学部は、個が持っている言葉を構成する力や知識を実生活において実際に用いていく力を「読解力」と位置づけ、読解力の育成を図ることで、高雄日本人学校における日本語力の育成と強化（中学部テーマ：言語感覚を磨く）を目指すこととした。

(2) 研修授業のねらいと取り組み

前年度の各教科の見取りからある程度明確になっていた生徒の実態・課題をより客観的に判断する材料として、4月に「経済協力開発機構（OECD）による学力到達度評価（PISA）の問題（読解力）」を全学年生徒に実施し考察を行っている。また、本授業の全体の目標としては、先に定義した「読解力」の中の「場面や目的に応じて言葉を読み取り構成する」「自らの考えの明確化を図る」に重点化して取り組んだ。A～Cの習熟度別クラスで予測される手立ては、以下の通りとした。

- A 言葉の知識（量や意味、いわゆる語彙力などの知識を高めること）を増やすこと
- B 言葉を構成・構築する力の育成
- C 言葉をTPOに合わせて使う力の育成

(3) 成果と課題

習熟度別にクラス分けをしたことで生徒一人ひとりの実態をよりの確に把握できたことになったが、各クラス約10名の生徒に教員1～2名の配置となり、自身の担当以外の生徒の実態を把握できないという課題がみられた。また、連続型テキストの読解は国語科の教科性が特に強く、他教科の担当教諭が限られた時間内で「どこを見取り、どのような手立てをしていくのか」が難しくと感じる場面も多々あった。生徒の意欲は非常に高く、回数を重ねるごとに読み取った情報を的確に言語化し記述することができるようになった生徒も多く観察できた。ただ、自身の感想としては、日常の授業をはじめ、生活全般に設定した言語能力の向上を反映するためには「読

み取った情報をどのように解釈し自分の表現としてまとめ、自身の考えを深めていくのか」というプロセスに着目することが必要であり、連続型テキストと非連続型テキストの読解をバランスよく取り入れることや、個人の学習にとどまらずグループでの学び合いを生かすこと。また他教科でも目標を同様にして取り組む実践の在り方が必要であるように強く感じられた。

3. 平成 26 年度の実践と考察

(1) 26 年度のねらい（読解力の伸長を達成するために）

- ① PISA 型読解力の向上
- ② 日常生活の言語活動の下支えをする学習
- ③ 言語意識（相手・目的・場面・方法・評価）を高める言語能力の伸長
- ④ 上記①～③の学習の学習を各教科内でも意識して取り組むこと

(2) 26 年度の取り組みについて

日付	教科	◆学習内容 ◇展開
5月9日（金）	オリエンテーション	今年度の目標と取り組みの提示
6月20日（金）	国語科	◆「非連続型テキストを活用した古典を読解」 ◇①古典の文章を表す図からキーワードとなる事実を切り取り、言語化する。 ②選んだ情報をまとめ、比較して意味を理解する「内容を推測、解釈」する。 ③自らがまとめた内容や他者の考えを基に「再考、論述」する。
9月26日（金）	英語科	◇英文を読むテクニックとなる Skimming と Scanning の違いを理解し、英文を読み取る技術を体験するとともに「実際に必要な情報を取り出す力」を身につける ◆非連続型テキストを用いた Scanning 体験。英文のビルボードチャートをもとに読解の課題に取り組み、話し合いを通し自身の考えを深める。
10月31日（金）	理科	◆「人類の歩みとエネルギー」に関する資料やグラフの読み取りを通して、連続・非連続型テキストの読解力の育成を図るとともに、読み取った内容をもとに既習事項と結び付けて考え、答えを導き出す力を育成する。 ◇「現代のエネルギー利用の変化」を説明した連続型テキスト及び非連続型テキストのグラフ、5つの設問中に提示されている写真などを活用し、石炭から石油への変容の理由を考える。 班の意見を全体でシェアリングし多様な考え方に触れるとともに BIGPAT（電子黒板）を用いた発表を行う。
11月21日（金）	社会科	◆「サラエボで起きた民族紛争から国際平和について考える」画像史料・モノ資料から読み取ったことから、世界の問題に気付く。 ◇教員が幼少期に外国人の友人からもらった絵葉書を用い、情報の根拠を明らかにしてその友人が住む国についてグループ、全体で確認した後、民族紛争後の4点の写真を提示。この国に起こったこと、そこにどのような理由があったのかを考えさせる
1月23日（金）	数学科	◆「つるかめ算の解き方を小学6年生に説明してみよう」 自分が学んだ数学的な問題解決の方法を相手に理解できるように伝える。 ◇非連続型テキスト（文章問題）を読解し、個人での思考を深めた後グループで問題の解き方を情報交換し合い自分が説明に使える解法を選択する。各学年の既習事項に合わせ課題である『問題の解き方』をいかにわかりやすく表現するかをグループで考え意見交流をする。

25年度、2・3年生については、(1)にある①～③を行うことで、中学部で定義づけた「読解力」が身につくと考えて実践に当たった。しかし、先述したとおり、「個々の学習に終始してしまい自己の考えを明確にもち、それらを交流する場面が多くなかったこと」や「非連続型テキストの読解に偏る傾向があり、日々の授業にどのような学びの場として還元させるかが明確ではなかったこと」など多くの反省事項を踏まえ、26年度は「教師間の連携を密にした授業づくりを意識し、日々の実践を交流できるようにすること」「多面的なものの見方→情報抽出→表現といった読解力定着のプロセスを念頭に上記①～③を中学部学習深化の時間（金曜日の6時間目）だけ

でなく、日常における各教科内でも積極的に取り組むこと」さらに「学習深化の時間も各教科と関連した課題を設定することでさらなる読解力の向上を目指すこと」を年度当初学部内の会議で確認し、新たに④の項目を付加し取り組みを行った。

(3) 成果と課題

①教科の特性を生かした読解力研修

各教科での取り組みという反省を生かし26年度は5教科の各担任教員が分担し1時間（50分）の授業を提案することとなった。その際、週に一度行われる中学部会内で約2週間を目途に取り上げる教材についての事前研修を行い、目標の確認と指導案の流れについて学部の教員が額を寄せ合い活発な意見交流を深めた。このことによって、各教科の特性を活かした取組を行えるようになり、連続型・非連続型の読解力をバランス良く学習できるようになったのではなかろうか。また、教科を異にする教師同士の積極的な意見交換が活発になり各教科のアプローチの良さを学びあえるとともに、日常の教科に還元できたことが大きな成果といえよう。



異学年集団による学びあいの様子

②中学部1～3年生による一斉授業

25年度の反省を踏まえ、個人による学習形態から「グループによる学び合いを生かした授業形態」への変更を行った。各学年の既習事項を考慮し、各学年の目標を一つの教材の中でそれぞれ設定するとともに、中学部2・3年生を中心としたグループ学習の形態を取り入れたことにより、学年間の知識量の差や躓きを軽減させ、生徒が自分自身の考えを発信し、仲間とともに学習を深めていくことができた。

③表現力の伸長

情報を抽出、選択し比較関連を付けながら熟考することへの意識付けが日常生活から生徒自身に身につくように感じられる場面が数多くあったように感じたが、結果（答え）にたどり着くことに終始する生徒が多く、考察の課程をグループで確認しあう場面などでは「なぜそのように考えたのか？」多面的な考察の課程をうまく表現することに苦労している様子が印象的であった。語彙力や読解の視点については身につけてきているものの「自分自身の考えを持ち表現していくこと」が本校生徒に求められるのではないかと考えさせられた。学校生活における数多くの場面で「表現」自身の考えを述べる機会を増やすとともに、来年度の課題として設定することを確認した。

4. 平成27年度の実践と考察

(1) 27年度のねらい（読解力の伸長を達成するために）

- ① PISA型読解力の向上（横断的なつながりを意識したテキストの活用）
- ② 日常生活の言語活動の下支えをする学習（各教科の特性を生かした読解力の取り組み）
- ③ 言語意識（相手・目的・場面・方法・評価）を高める言語能力の伸長
- ④ 自己の考えを深め、表現する場面の設定

(2) 27年度の取り組みについて

26年度は上記の狙いを具現化するため、「国語科との連携を踏まえつつ各教科の特性を生かした読解力アプローチ」と「異学年集団による活動」が明確に研修の方向性として位置づけられた。学習の流れとしても「個人の追求（情報抽出）→グループによる交流（熟考）→全体でのシェアリング（表現）」が明確となり、生徒に身につけさせたい能力を教員が同一の視点で見取り、志を一つにし1時間の指導案検討を長時間かけて練り上げ我々自身が教材の開発を楽しめたことも非常に貴重な経験であったように感じる。また、生徒も日常生活において「非連続型テキスト」や「多面的なものの見方」「クリティカルシンキング」といった言葉を自然に口にする

機会がみられ、学部全体に「意欲的に読解することを楽しみ、学ぶ」意識が高まっていると感じられた。27年度においてはこれらの一定の成果を踏まえさらなる読解力向上の手立てとして「表現する場面の設定」をより意識した授業づくりをすること。さらに、校舎移転を機に本校へ導入されたBIGPATを引き続き使用し、視覚的に教材を提示したり、生徒が発表する際に効果的に活用したりすることで、仲間の思考の課程や自身の考えとの違いを明確に知り、交流および表現力を深めることを狙った。

なお、生徒一人ひとりの理解度や習熟度の見取りに気を配り、前年度以上に配慮した教材づくりや教科間のつながり（連続型テキストと非連続型テキストのバランス・異なる教科での同一テーマによる多面的なものの見方や考え方に触れること）を意識した。

※27年度は派遣教員4名による（国・理・社・英）での実施となったが、研修授業の取り組みを各教科の日々の授業に生かせるよう意識した。

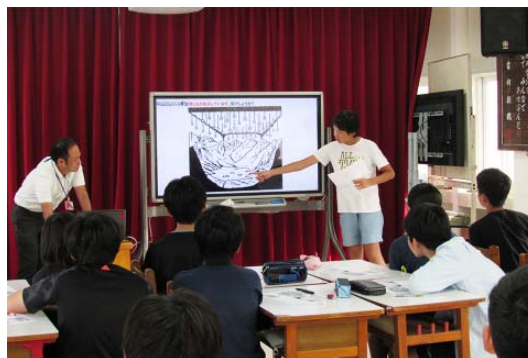
※各教科の横断的なつながりを考慮し、また、国・英で「(1) 連続型テキストの読解と非連続型テキストの活用」「(2) テキストの批判的な読解」を理・社で非連続型「(1) テキストの読解」と「(2) テーマの視点を変えたアプローチ」を共通意識し、第5回の英語では生徒の表現の様子を1年間のまとめとして位置づけ考察した。年間を通じ、学び合いを生かした授業の流れは同一としている。

(3) 成果と課題

日付	教科	◆学習内容 ○ねらい
5月1日(金)	オリエンテーション	◆27年度中学部『読解力』における目標と取り組みの提示 ○～根拠を明らかにして表現をするということを考える～ 
6月5日(金)	国語科	◆「連続型テキスト（文学的な文章）の読解」 ○自身の考えについて根拠を明らかに表現する。 非連続型テキストの活用→批判的読解
9月18日(金)	理科	◆「非連続型テキストの読解」～惑星の定義をふまえて『冥王星の取り扱い』を考える～ ○多様なデータの読解と仮説検証理解。（科学的リテラシー）
11月20日(金)	社会科	◆「惑星に関する社会的アプローチ」地動説と天動説を非連続型テキストから読み解く～なぜガリレオは許されなかったか～ ○歴史上の証拠を分析比較し、整合性を検討する。
1月22日(金)	英語科	◆「非連続型テキストを活用した連続型テキストの読解」 「ことわざ」を通じた英語と日本語の比較関連。4コマ漫画の絵を見て発想を広げ、初歩的な英語を用いて、表現する。 ○～テキストの批判的読解②一年間の「表現力」の深化～

物事を多面的、客観的にとらえるためのしかけ作りに毎回のこと頭を悩ませながら、批判的な思考の場面を各教科で意図的に取り入れたことにより、1年間で生徒が自身の決定した結論に対して自身で積極的に吟味をしようという素養（内省的思考）が備わってきたように感じられた。

また、それぞれの教科を担当した教員が「生徒主体によるグループ学習」を日常の授業で多く実践していたこともあり、生徒相互の学び合いが定着していた。読解力研修においても他人の意見に耳を傾けたり、下級生に情報抽出の根拠をわかりやすく教えたりするといった受容的な雰囲気が満ち、生徒



ICT (BIGPAT) を活用した発表の様子

一人ひとりが「自分の考えを言える場」という認識をもって「表現」することができていたように思う。

さらに、教員間での統一認識として、習熟度に差がある生徒を予測し、3段階に分け情報をより抽出しやすいテキストを用意していたことやICT（情報通信技術）を用いた実践を取り入れたことで、違和感なく異学年集団の共同学習が深化していったように感じられる。

設定されたねらいのもと、「教材」と「生徒」をいかに結び付け、また、どのような「読解」から「表現」までを1時間の中で生徒に定着させるのか。議論に議論を重ね、中学部教員が叡智を結集させて授業づくりをしたことや、年5回という少ない授業を心待ちにし、輝く表情で毎回成長していく生徒の姿を目の当たりにできたことは貴重な経験となった。

自身の考えを仲間に伝える過程、他者の考えを受け入れ自身の考え方と比較し熟考する過程とを繰り返し、「自身の考えをもつ」という（テキストの評価）にまで言及し議論を重ねた27年度の取組は、テキスト内部の情報抽出や解釈からさらに幅広い意味で社会に生きて働く汎用的な「読解力」のスキルを身につける一助となっていると考察している。

25年度、「日本語力の向上」というテーマ設定に頭を悩ませながらスタートした中学部読解力研修は「日本語の正しい知識の習得」にとどまらず、多様なものの捉え方を自身で振り返りながら積極的に「読むこと」を意識し、自己理解や他社理解を深め、「自己の表現」を決定していくことまでアプローチできたところに大きな成果があると自負している。「すべては生徒のために」日々の授業から立ち返り、共に研修の実践に当たった懐かしい日々。苦楽を共にしたバイタリティ溢れる中学部教員からは本当に多くの刺激をいただき感謝申し上げたい。